

協同組合等の非営利組織が設立したフードバンクかながわ — 生協の物流網の活用・独り暮らし学生への食料支援 —

主事研究員 一瀬裕一郎

2019年に「食品ロスの削減の推進に関する法律」が施行された。食品ロス削減は、国連が掲げたSDGs目標(「2 飢餓をゼロに」「12 つくる責任つかう責任」等)にも合致する。国は食品ロス削減の政策対象の1つにフードバンク(以下「FB」)を位置づける。

FBとは「包装の印字ミスや賞味期限が近いなど、食品の品質には問題ないが、通常の販売が困難な食品・食材を、NPO等が食品メーカーから引き取って、福祉施設等へ無償提供するボランティア活動^(注1)」である。

相対的貧困率が1985年の12.0%から15年の15.7%へと長期的に上昇^(注2)し生活困窮者が増加するなかで、近年FBが各地に設立され、全国で100を超える団体が活動している。

FBに対する人々の関心は年々高まりつつあ

り、「フードバンク」を含む新聞記事件数をみると、コロナ禍が襲った本年には年半ばながらすでに100件を超える(第1図)。

ここでは、生協や農協等の非営利組織によって設立され、食品メーカー等と連携しながら、食料支援を続けるフードバンクかながわ(以下「FBK」)の取組みを紹介する。

1 FBKの沿革

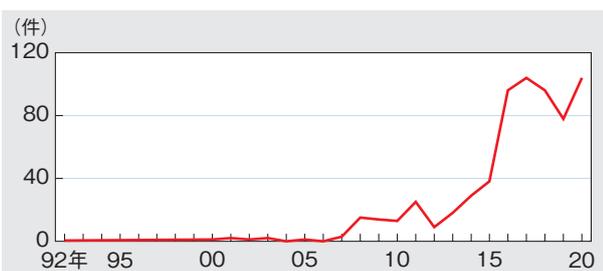
生協、農協、労働者福祉協議会等、非営利組織12団体が神奈川の暮らしを良くするためにできることはないかという問題意識の下に15年から協議を重ね、18年3月に一般社団法人FBKを設立した。安価に賃借した横浜市金沢区の旧生協店舗を拠点に同年4月事業を開始し、10月に公益社団法人へ転換した。公益法人は収益や寄附に関する税制上の優遇措置を受けられるだけでなく、農協等多様な組織がその活動に参加しやすい組織形態だという。なお、全国130組織ほどのFBのなかで、FBKが唯一の公益法人である。

2 FBKの食品調達と配布の仕組み

FBKは生活困窮者等の個人への食品配布は行わず、食品メーカー等の事業者や家庭から寄せられた食品を、県内FBや子ども食堂、社会福祉協議会、市町村等の需要者へ提供する中間支援組織としての活動に徹している。

取扱品目は、常温保存可能で賞味期限まで2か月以上ある食品である。FBKは需要者のニーズを把握したうえで、事業者へ数量・品目等を打診する。ニーズが最も高い品目は米

第1図 「フードバンク」を含む記事件数



資料 日経テレコン記事検索より筆者作成
(注) 検索媒体は朝日新聞、検索期間は全期間とし、20年7月9日に検索を実施した。



写真1 フードバンクかながわ全景(筆者撮影)



写真2 左：二次元バーコードでの管理、右：生協物流インフラを利用するカゴ車(筆者撮影)

であり、上限なく寄附を受け付けている。

FBKが事業者から届いた食品を受け取る際、二次元バーコードを発行・貼付して、入出庫管理を行っている^(注3)。このようなトレーサビリティを確立しているFBは珍しい。

入庫した食品は、常勤職員3人と登録ボランティアが、品目別に仕分け・計量し、需要者ごとに必要な品目・数量を段ボールや折り畳み式プラスチックコンテナへ箱詰めする。なお、登録ボランティア以外にも、学生からシニアまでの幅広い年齢層の多数の市民が仕分けや箱詰め作業等を体験する学習会へ参加し、食品ロスや貧困問題への理解を深めている。

提供先ごとに箱詰めされた食品は、それぞれの需要者が定期的に引き取りにくるのが基本である。とはいえ、需要者は県内全域に散在しており、例えば小田原のような離れた地域から引き取りにくるには片道2時間ほどを要するため、費用や時間の面で負担が大きい。そこでFBKでは生協の物流インフラを活用して、需要者にとって最寄りの生協配送センターまで食品を輸送する取組みを行っている。具体的には生協店舗へ納品したトラックの帰り便を活用する仕組みであり、輸送料金はカ

(注1)消費者庁WEBサイト参照。

(注2)阿部(2020)参照。

(注3)フードドライブ等で家庭が寄附した食品は二次元バーコードではなく、賞味期限と種類(調味料、菓子、等)別に仕分けられ管理される。

ゴ車1台800円と相場よりかなり安価に抑えられている。この仕組みは、コープ東北が12年に設立し、東北6県で事業を行っているコープフードバンクに倣ったという。

3 コロナ禍でのFBKの活動

コロナ禍での緊急事態宣言により余剰となった学校給食用のロングライフ牛乳、催事用の飲料や菓子、機内食等の業務用食品が大量に寄せられた。それと同時に、休校期間に家にいる子どもの世話のため働きに出られないシングルマザーやアルバイト先を失った学生等、新たに支援を必要とする生活困窮者も大幅に増加した。

FBKでは20年4月という全国的にも早い時期から、市町村、社協、大学、食品メーカー、農協等の多様な組織と連携し、親元を離れて県内で自活する独り暮らしの学生に対して米、缶詰、カップ麺等を提供している。

依然コロナ禍が収束しないなかで、20年度のFBKの食品提供量は著増しており、その活動は地域社会にとって今後ますます重要となろう。

一般的にFBの大きな課題は資金と物流だが、FBKは、公益法人という組織形態、中間支援への特化、多様な組織の連携、生協の物流網の活用、等により、これらの課題を巧みにマネージしている。課題に悩む各地のFBにとって、FBKは示唆に富む1事例となろう。

<主要参考資料・WEBサイト>

- ・阿部彩(2020)「相対的貧困率の長期的動向」
<http://www.gender.go.jp/kaigi/senmon/5th/sidai/pdf/anzen/01/04.pdf>
- ・小林富雄・野見山敏雄編著(2019)『フードバンクの多様性とサプライチェーンの進化 食品寄付の海外動向と日本における課題』筑波書房
- ・コープ東北 コープフードバンク
<https://www.tohoku.coop/foodbank/>
- ・消費者庁 <https://www.caa.go.jp/>
- ・フードバンクかながわ <https://www.fb-kanagawa.com/>

(いちのせ ゆういちろう)